

文化的学習における社会的パートナーの役割

－日本・中国・米国における母子の語りの比較－

日本獣医生命科学大学	柿 沼 美 紀
文京学院大学	上 村 佳世子
中山大 学	静 進
スタンフォード大学	若 林 巴 子

What are the roles of social partners in cultural learning?

- comparison of joint storytelling in Japan, China and US -

Nippon Veterinary and Life Science University

Bunkyo Gakuin University

San-Yat-Sen University

Stanford Univeristy

KAKINUMA, Miki

UEMURA, Kayoko

JING, Jin

WAKABAYASHI, Tomoko

対立的な人間関係を暗示する線画を、3地域に住む57組の母子（3-5歳）に提示し、その語りを分析した。新生児期より環境との相互作用を通して学習を重ねた子どもに対して、1）母親が伝えようとする技術と行動様式、2）伝達内容と母子が生活する環境の関係、を検討した。57組の内容分析の結果、複数のタイプに分かれたものについて、タイプ別に居住地域との関連について検討した。その結果、日本、中国、米国といった居住地域によってその差を説明できるものとできないものがあった。幼児期に母親を介し獲得するものに、文化特有な価値観、情報処理方法、対人関係等が含まれることが示唆された。先行研究で得られた伝達方法の再分析を含めて、語り場面における伝達内容と手段に関して社会的パートナーと文化的学習の視点から考察した。

【キー・ワード】 母子の語り、文化的学習、日本、中国、米国

はじめに

日本と中国、米国の違いは何かと問われれば、公用語、憲法、法律といった明文化されたものから、衣食住など子どもを取り巻く環境までである。子どもはそのような枠組みの中に生まれ、環境との相互作用を通して社会の一員として、必要な技術や行動を身につける。新生児がどの段階から、どのような過程で何を身につけるのかを解明すべく、実験、観察、文化間比較などが行われてきた。文化間比較は環境の影響を分析する手段として多用される一方で、「個」の特性に目を向けず、集合体として人を分析することの限界も指摘されている(Azuma 2006)。著者らは、母子の語り研究を通して文化的学習の検討を行ってきた。本研究では、語りにおける文化的学習の影響を再検討すべく、語りには文

化の影響は見られないという前提で分析を行った。

子育てと子どもの発達

人の子育てにはさまざまな形態がある。乳児への関わりには文化差があり、養育形態の違いがその後の発達に関連している事はこれまでも多く指摘されてきた(例えば Bornstein 1992; Rogoff 2003)。子育ての文化差は授乳方法、母子の密着時間、就寝形態、母親による子どもの声かけの種類、頻度など多岐にわたる(Keller 2003)。

言語発達の研究から、子どもは生後 12 ヶ月までに環境との相互作用で一定の技術、行動を獲得することが示されている。言語発達以外の研究報告も、子どもは生後間もなくから環境と関わりを持ち、その影響を受けていることを示している。例えば、生後数時間で人の表情の模倣が可能である(Meltzoff 1977)。4 ヶ月時には人の視線を意識し、必要な情報収集を行っている(Farroni 2004)。6 ヶ月時に乳児はすでに、聞き慣れた音節とそうでないものを区別し、聞き慣れた音を好む(Maye 2002)。

一連の初期の環境との関わりは、その後の発達にも関与している。10 ヶ月時の追視の発達は、18 ヶ月齢の言語発達との相関が見られ(Brooks & Melzoff, 2005)、6 ヶ月齢、12 ヶ月齢時の母親の語りかけは、45 ヶ月齢及び 48 ヶ月齢の子どもの心の理論の発達と関連がある(Meins, Fernyhough et al. 2002)など、子どもは早期から自分を取り巻く環境に能動的、かつ選択的に関わり、一連の能力はその他の発達にも何らかの影響を及ぼしている。

社会的パートナーとしての母親

子どもの学習を促す役割として Spelke & Kinzler (2007)は、安全で信頼できる社会的パートナーの存在を示唆している。乳児の段階ですでに子どもは母語を話す人を好み、同じ人種に反応が良く、母語を話す人が提供する情報を信頼する傾向があるためだ。慣れ親しんだ人に対する嗜好は、子どもの学習における社会的パートナーの感知につながり、その存在は, Tomasello(1999)の「文化的学習」における指南役となりうると指摘している。

子どもは社会的パートナーとしての母親と情報を共有し、価値観等を学ぶ。また情報の共有方法も学ぶ。母親は、子どもが生きて行くために必要な技術や行動様式を早い段階から学べるように促す。そのために子どもの発達に応じたアジェンダを持っていると思われる。例えば、価値観、着目すべき点、状況の解釈、葛藤の解決方法、登場人物との関係などである。そこには、母親との相互作用のあり方など、人との関わり方も含まれる。

子どもは自分を取り巻く環境によって学習する内容が異なり、それが子どもの認知特性に影響している。言語獲得においては母親などの身近な人との相互作用が重要であるが、より複雑な社会的判断においても同様の仕組みが存在すると思われる。

母子の語り研究

著者らはこれまでに、母子の語り研究を三文化圏—日本、中国、米国—及び日本国内の三地域—沖縄、東京、山形—ならびに中国内の二地域—広州、内モンゴル自治区—において行ってきた。母子を

対象に同じ課題を用いた調査を実施，語りの内容を文化，地域など母子の所属する地域を軸に分析してきた(上村・柿沼 2006, 柿沼他 2006, Kakinuma, et al 2005 ;Wakabayashi, et al 2001)。その結果，いずれの地域でも母親は，語り場面をその社会で必要な技術や行動規範を教える場ととらえ，3歳の時点で子どもそういった相互作用に参加していた。一方で，母親がどのような情報を選択し注意を促すか，あるいは子どもをどう参加させるかは文化，地域によって異なっていた。このような相互作用が子どもの社会性の発達に影響を及ぼしていると考えられる。

社会的パートナーは文化を伝えているのか？

本研究では，3-5歳の子どもと，母親との「語り場面」の分析を通して，文化的学習の過程について検討する。具体的には，社会的パートナーである母親が，子どもに対して葛藤場面の状況分析，対応方法，母子間の情報伝達の方法に関して地域特有のものを伝えているか分析した。文化差とは何かを検討する目的で，比較的単純で明快な要素に焦点をあて検討した。

方 法

調査対象者：日本，中国，米国の3-5歳の子とその母親。日本は東京在住の親子20組（平均年齢53ヶ月，男11名，女9名）が参加。中国は，広州市在住20組（55ヶ月，男10名，女10名）。米国はカリフォルニア州スタンフォード市周辺の親子17組（59ヶ月，男10名，女7名）。

課題：Wakabayashi et al, 2001と同じ手順。子どもの絵本を参考に作成した対立的場面の線画4枚（はしご，泣いている子，砂浜，走っている子）を提示し，それを用いて母子で話をしてもらった（本誌上村他 2007，図1-1～1-4参照）。日本では自宅及び友人宅，中国は幼稚園の一室，米国は自宅で実施。母子のやりとりは音声と映像で記録し，録音テープを起こして分析。中国のデータは中国語に起こした会話を日本語に翻訳。翻訳の一部は別の中国人が翻訳し，整合性を確認。分析には翻訳文と原語を参照しながら分析。英語は原文を用いた。

分析項目は以下に示す。

登場人物の呼び名：6-7名が登場する「砂浜」と「走っている子」を使用。絵の中の子どもの扱いを3種類に分けた。1）特定はしないが，知り合い，あるいは知り合いとなりうる人物「お友達」「おにちゃん」（「にに」などの愛称は除外，文脈から名前は知らない人と判断されたもののみ）中国では「小朋友」，“friend”，2）具体的な名前（実在する必要はない）か，特定の人の愛称（「ねーね」など），3）不特定「この子」，“he” “this girl”など。

対立的解釈：登場人物間の競争的，対立的関係など葛藤に関する発話の有無。砂浜：一人でいる子が「けんかした」「なかまはずれ」“she is mad”など。はしご：「盗み食い」，“いたずら”，“mom will be angry”など。泣いている子：「棒でたたいた」「けんかした」“he（泣いていない子）broke it”など。

走っている子：「この子が一番」「よーいどん」 “he is chasing him” “they are having a race”など。

対話形式：Kakinuma(2005)の結果をもとに、「泣いている子」の登場人物が「泣いている」と言及するのは「母のみ」「子のみ」「母子両方」のいずれかを分析。

言及内容：柿沼他(2006)の結果、「はしご」の語りで、特定の居住地域では見られなかった内容を中心に、子どもの意図の解釈（「悪い行い」、「善意の行動」）と、「茶碗が落ちる」、「子どもが落ちる」の4項目を分析。

結 果

登場人物の呼び方：57組の内訳は「名前」が39%、「友だち」が42%、「名前・友だち」が9%、「不特定」が28%であった。それぞれのタイプを母子の居住地域別（日本、中国、米国）に分析した結果違いが見られた ($\chi^2(4) = 39.917, p < .01$)。残差分析の結果、「名前」は日本 > 中国 ($p < .05$)、「友だち」中国 > 日本及び米国 ($p < .05$)、「不特定」米国 > 中国 ($p < .05$)と、それぞれのタイプで特定の地域がしめる割合が高かった（図1）。文化内の分布は日本の75%が「名前」、中国の75%が「友だち」、米国の64%は「不特定」となっている。

対立的解釈：登場人物間に競争的、あるいは対立的関係をみいだすか分析。57組における競争、対立的言及率は57%であった。競争・対立的解釈の言及には居住地域別による違いが見られ ($\chi^2(2) = 9.687, p < .01$)、残差分析の結果日本 > 米国 ($p < .05$)であった。結果は登場人物の呼び名ほど明確ではなかった（図2）。日本では対立的解釈の言及率が69%、中国63%、米国43%であった。

対話形式：泣いていることに「母のみ」が言及したのは46%、「子のみ」が22%、「母子両方」が32%であった。それぞれのタイプを母子の居住地域別に分析した結果、有意差が見られた ($\chi^2(4) = 24.973, p < .01$)。残差分析の結果「母のみ」米国 > 中国 ($p < .05$)、「子のみ」中国 > 米国 ($p < .05$)、「母子両方」日本 > 米国 ($p < .05$)となった。米国の87%は「母のみ」、中国の58%「子のみ」、日本の52%「母子両方」形式であった。母親と子の参加率に関する有意差が見られた ($\chi^2(2) = 16.789, p < .01$)。残差分析の結果、母親の参加率は米国 > 中国、子は中国 > 米国 ($p < .05$)であった。

言及内容：「悪い行い」の解釈は全体の57%、手伝いなどの「善意」の解釈は13%であった。米国では「あやまって落とした」という記述はあっても、そもそもの目的が手伝いといった解釈は1例もなかった。茶碗の落下に関する言及は82%、子どもが落ちるは16%。日本では子どもが落ちることへの言及は1例もなかった（項目別文化差については柿沼他2006を参照）。

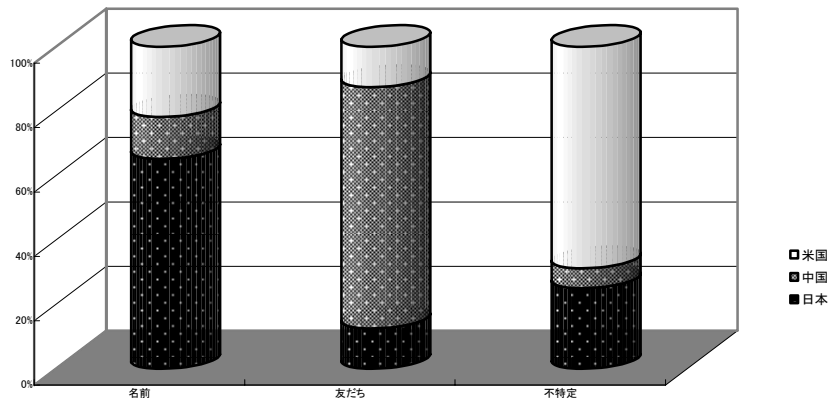


図1 登場人物の呼び名内訳 (棒グラフ)

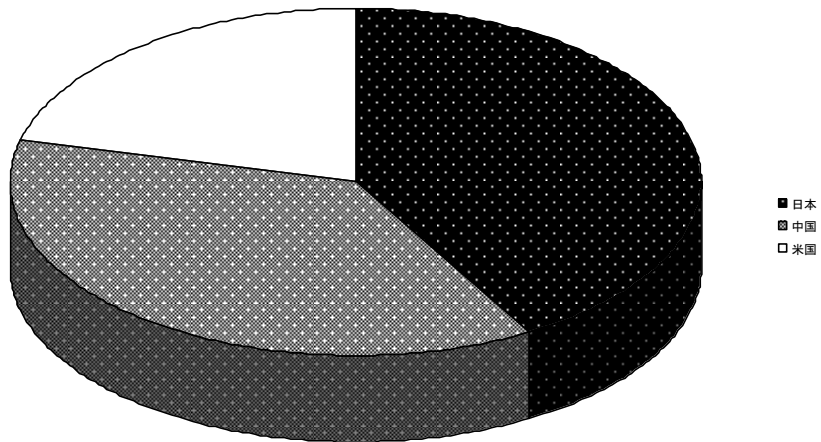


図2 対立的解釈の内訳 (円グラフ)

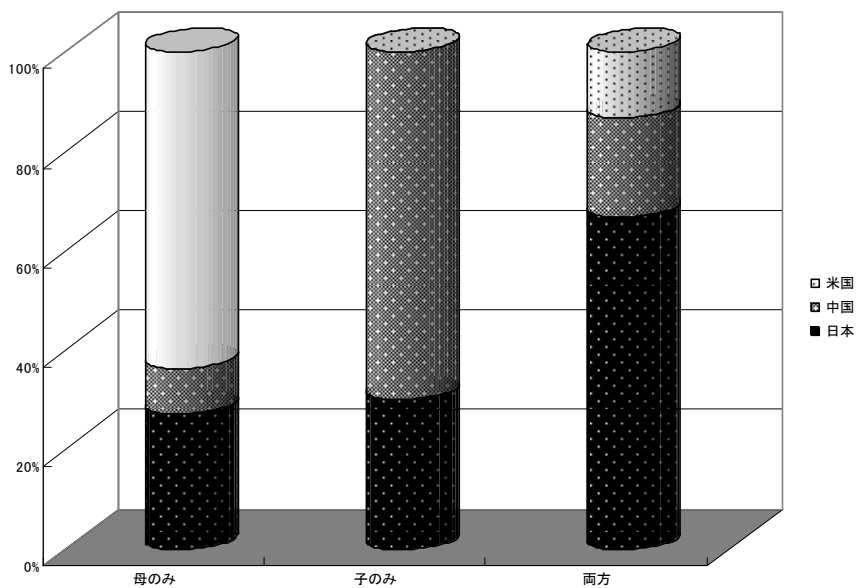


図3 「泣いている子」対話形式 (棒グラフ)

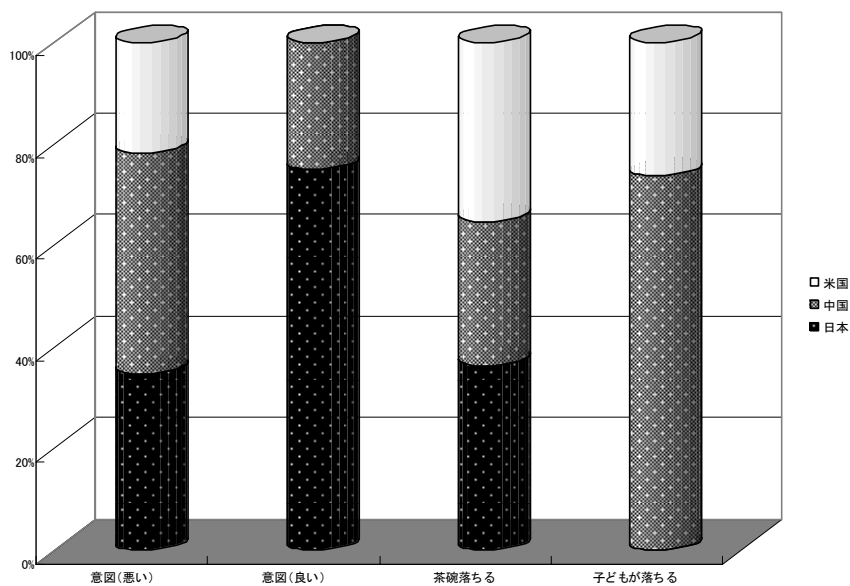


図4 「はしご」の解釈 (棒グラフ)

考 察

1. 居住地域が意味するもの

57組の語りの分析で、その内容が3タイプに分類できたものが複数あった。一つのタイプに特定のグループに属する母子が有意に多い場合、グループで共有される価値観がそこに一定範囲で反映されていると言える。居住地域（日本、中国、米国）とタイプが一致したものには使用言語（日本語、中国語、英語）がある。当然ではあるが、一般的に使用言語は母子が生活する環境で共有されているものである。

登場人物の呼び方の3タイプ間に有意差はなかったが、それぞれのタイプ内で有意に多かった単位は居住地域であった。登場人物の呼び名に関しては、使用言語ほどではないが、地域共通の考え方が反映されていると言える。

ちなみに、名前前で呼ぶ、あるいは友だちと呼ぶ行為は絵の中の登場人物を自分の仲間(us)と見なし、特定しない場合は他者(them)にあたると言える。従って日本と中国は絵の状況を身近な状況と捉え、米国では知らない人の状況と捉えている可能性がある。

語りの進め方においても、3タイプが検出された。「泣いている子」の絵において中心的な情報、「泣いている」と言うのは、母のみ、子のみ、母子両方であった。ここでも居住地域が特定のタイプに集中していた。呼び名ほどの差はなかったが、地域の行動規範をある程度推測出来る結果であった。

一方対立的解釈に関しては、地域による差はみられるものの、呼び名ほど明確ではなかった。対立的解釈の有無には個人、地域など、さまざまな要因が影響しているため、地域による統一感は低くなると思われる。

2. 特定の地域に見られない考え方

「はしご」には、特定の居住地域に見られなかった項目があった。日本では「子どもが落ちる」事に関する発話は、筆者らが別途沖縄と山形を対象に行った36組を含めても1例もなかった。日本では子どもが落ちる、怪我をするといった発話に違和感をおぼえる母親も多いと思われる。中国では3割強が言及しているだけだが、そのような説明に日本人ほど違和感をおぼえないと思われる。

子どもが「母親を手伝っている時に、茶碗を落としそうになった」という説明は日本に見られ、米国ではなかった。上記の「子どもが落ちる」に比べると言及率は下がるが、日本の場合はそのような解釈も可能だと感じ、米国では違和感を覚える可能性がある。

呼び名並びに対立的解釈に関しては、いずれの居住地域でも少数ながら言及が見られたが、上記の2項目は、言及率は「ある」／「ない」と二分化している。言及がない場合、それはなじみのない、あるいは、共有されることがまれな考え方であろう。

上記のような欠落も、またその地域の特性を表している。つまりその地域では、「子どもが落ちる」ことには言及しないという共通認識があるためだ。

3. 共通認識の意味

本研究の結果から、身近な社会的パートナーである母親は、子どもに特定の文化的学習を促すべく伝達の場を作っていると思われる。また、そこには地域、家庭、個人といったレベルの経験をふまえた情報伝達も行われているのだろう。いずれにせよ、母親は子に生活に必要な技術や行動パターンを日常生活の中で繰り返し伝えている。

文化を構成するものには、いくつもの段階がある。使用言語、登場人物の呼び名、対話形式、対立的解釈の有無などのように、様々な要素が必要に応じてその強度を変化しながらグラデーションで文化を形作っているのではないか。

4. 文化比較

語り場面においても文化的学習は存在する。それは一定の割合で共有されるものであった。語り場面において、たとえ自分が積極的に文化に特徴的なパターンを用いなくとも、それに対する違和感は大きくないだろう。半数以上が用いたものであれば、一般的な解釈と感ずるのではないか。

一方で、日本では一例もなかった「はしごから落ちて頭から血を出す」という発話は多数ではないが中国では見られた。おそらく中国ではそのような考えに触れる機会があり、日本人ほど違和感をおぼえないと思われる。

著者らの語り研究の文化比較から、道徳的判断、状況の概念化などにまで及ぶ価値観の共通点、相違点が明らかになっている。これは多くの文化心理学研究の知見とも一致するものである。子どもは早期からの社会的パートナーとして母親の存在を理解し、それを介して学習する能力が備わっているために生じるのだろう。学習内容は言語獲得のような自明なものから、母子の信頼関係のありかた (Rothbaum et al, 2000)、道徳観 (Azuma 2000; Shweder 1987)、さらには認知特性等 (Wellman, Cross et al. 2001) といった広域に及ぶものである。

Splke & Kinzler (2007) は、社会的パートナーを介して二元的に自分と相手と分けて認識する方法は、多様化した現代社会には必ずしも適切ではないと指摘している。本研究の結果からも、人は幼児期からの身近な社会的パートナーを介して問題解決方法、情緒的視点取りの方法等を繰り返し学んでいると推測できる。「はしごから落ちたら頭を打って血を出す」と問題回避型の解釈を教わった子どもと、「なぜ子どもはこのようなことをしたのか」と他者の視点取りを教わった子どもが同じ状況に置かれた場合に、相手の解釈、判断、行動にどう反応するのだろうか。

社会的学習は時には異質な物に対するの誤解、偏見をも生む可能性も含む。それは多くの情報が情緒的な意味合いを含んだ形で世代を超えて伝達されるからではないだろうか。道徳観、宗教観の違いもまさにその例である。グローバル化の中、未知の物と出会い、自分とは異なる経験をしてきた人と行動を共にする機会は増えるだろう。相互理解を深めるためには、お互いの価値観がどのように育まれ、なぜ他を受け入れるのに抵抗があるかを理解することが重要である。

References

- Azuma, H. (2000). Moral scripts: A U.S.-Japan comparison. *Japanese frames of mind*. H. S. R. A. LeVine. Cambridge, UK, Cambridge University Press.
- Azuma, H. (2006). The era of fluid culture: conceptual implication for cultural psychology. *Progress in Psychological Science around the World, Vol. 2: Social and Applied Issues*. Q. e. a. Jing, Taylor & Francis Psychology Pr.: 305-318.
- Bornstein, M. H., Tamis-LeMonda, C. S., Tal, J., Ludemann, P., Toda, Su., Rahn, C. W., Pecheux, M., Azuma, H., Vardi, D. (1992). "Maternal Responsiveness to Infants in Three Societies: The United States, France, and Japan" *Child Development* 63(4): 808-821.
- Farroni, T., Johnson, M. H. & Csibra, G. (2004). "Mechanisms of eye gaze perception during infancy". *Journal of Cognitive Neuroscience* 16(8): 1320-1326.
- Kakinuma, M., Uemura, K., Jing, J., Jin, Y., & Mayuzumi, M. (2005). "Mother's moral messages to her children through story-telling sessions-Chinese values judge right and wrong, Japanese morals emphasize harmony-." Paper presented at Childhoods 2005.
- 柿沼美紀・上村佳世子・静進. (2006). 文化的学習の場面としての母子の語り(1)ー日本・中国・米国における非言語的情報選択ー. 発達研究, 20, 13-22.
- Keller, H. (2003). "Socialization for competence:cultural models of infancy." *Human Development* 46: 288-311.
- Maye, J., Werker, J. F., Gerken, L. A. (2002). "Infant sensitivity to distributional information can affect phonetic discrimination." *Cognition* 82: B101-B111.
- Meins, E., Fernyhough, et al. (2002). "Maternal mind-mindedness and attachment security as predictors of theory of mind understanding." *Child Development* 73(6): 1715-1726.
- Meltzoff, A. N. & Moore, M.K. (1977). "Imitation of Facial and Manual Gestures by Human Neonates." *Science* 198(4312): 75-78.
- Rogoff, B. (2003). *The cultural nature of human development*, Oxford University Press.
- Rothbaum, F., Pott, M., Azuma, H., Miyake, K., Weisz, J (2000). "The Development of Close Relationships in Japan and the United States: Paths of Symbiotic Harmony and Generative Tension." *Child Development* 71(5): 1121-1142.
- Shweder, R., Mahapatra, M., Miller, J.G. (1987). The emergence of morality in young children. *Culture and Moral Development*. J. K. S. Lamb. Chicago, University of Chicago Press: 1-83.
- Spelke, E. S., & Kinzler, K. D. (2007). "Core Knowledge." *Developmental Science* 10(1): 89-96.
- Tomasello, M. (1999). *The cultural origins of human cognition*. Cambridge, Cambridge University Press.
- 上村佳世子・柿沼美紀. (2006). 文化的学習の場面としての母子の語り(2) : 東京・山形・沖縄における社会的相互行為. 発達研究, 20, 23-32
- Wakabayashi, T., Fernald, A. & Kakinuma, M. (2001). "What, how and why?: Japanese and

American mothers' questions in joint storytelling sessions." *Poster presented at the 2001 Biennial Meeting of the Society for Research in Child Development, Minneapolis, MN.*

Wellman, H. M., D. Cross, et al. (2001). "Meta-analysis of theory of mind development: The truth about false-belief." *Child Development* 72: 655-684.

<謝 辞>

本研究で用いた線画を作成し、使用を許可して下さった Stanford University の Anne Fernald 博士に心より感謝申し上げます。また、本研究の調査にご協力いただいた米国、中国並びに日本の親子の皆さんに心よりお礼申し上げます。

<付 記>

本研究は科研費基盤研究 (B) 『行為の理解, 推測, 評価の認知的枠組みとしての文化的スクリプト : 日・米・中比較研究』及び学術フロンティア推進事業「LD の国際比較研究-非言語性能力・心の理論課題検査の作成と日中比較」の一部として実施された。